

はじめに、このたびの台風14号、17号で被災された地域の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

10月7日、都内を中心に歩く建築散歩はこの日、秋晴れの東京を離れ初の海外ツアーとなる台湾へ。約3時間のフライトを経て着いた台北市は、まとわりつくような湿気と雨で濡れていました。

今回のこのツアーは、特別ゲストとして以前伊東豊雄事務所に勤務されていた建築家佐野健太氏を迎え、建築散歩講師岡村裕次氏とのダブル講師という豪華版で挑みます。

台北到着後、まずは腹ごしらえ。日本にも支店がある鼎泰豊本店でランチを頂きます。観光客だけでなく地元の人達にも愛され利用されている当店の店先には、順番を待っている人達で大賑わい。恐縮しながら上階の個室に案内され、席に着くや否や次から次へと運ばれてくる料理に舌鼓。どことなしか日本より小籠包の大きさがひとまわり大きい気がするのはいけいでしょうか・・・。

お腹も満たされたので、やはり腹ごなしには建築散歩。日本統治時代、大学教授や文化人が多く住んでいた青田街（青田買いではありません）へ向かいます。この地域は日本統治時代の面影を残す地区で、当時の日本家屋などをレストランやカフェにリノベーションし、台北市の中でも話題の地区の一つとなっています。日本統治時代からある樹々は自由気ままに生い茂り、パステル色に彩られたタイル張りのマンションと相まって、ノスタルジックな街並みを形成していました。日本と台湾の歴史をなんとなく感じつつ、台湾大学社会科学学院図書館へと進みます。



台湾大学は日本で言う東京大学的存在で、世界でも有数の国立大学の一つです。社会科学学院図書館は伊東豊雄氏の設計により2013年に建てられ、多くの学生達が利用しています。台湾大学の職員の方に案内され館内を見学しました。館内は木々のように伸びる柱に支えられ、白亜の森の中にいるよう。ここで注目したいの



は空調システム。蒸し暑い台湾の気候において、いかに省エネを実現するかという点で、床下に冷水を流し、館内を緩やかに冷却する方法を採用しました。学生達にとってエアコンの音や直接当たる冷風は学ぶ環境として不向きです。また照明においても自然光や間接的な

照明により、部屋全体を優しく照らす効果を生み出しています。

この図書館は東京都八王子にある多摩美術大学の図書館を模範としており、台湾大学の職員スタッフが多摩大学図書館を視察した際、感銘を受けたスタッフが伊東氏に依頼して実現したものです。やはりどこことなく多摩大学図書館に似ています。館内の家具も多摩大学図書館と同じく藤江和子さんが手がけ、学生たちはソファに寝転んだり、床に座って読書したりと自由に且つゆったりと利用していたのが印象的でした。写真の本棚は大学の敷地に樹勢していた竹を使用し作られたものです。この日、案内して頂いた大学職員の方は、時々日本語を交えながら、図書館愛、大学愛がめっちゃ溢れるステキな方で、聞いているわたしもほっこりしました。



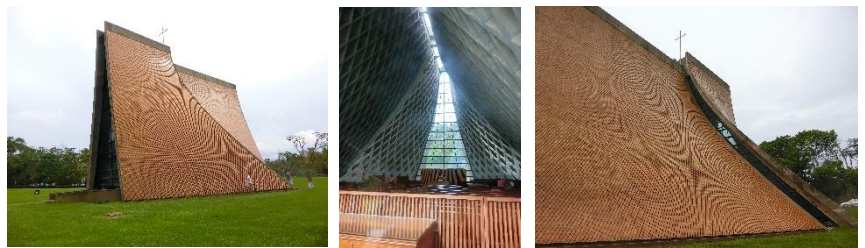
日も暮れ、この日の建築散歩は台湾大学図書館で終了。夜になり雨も強くなる中、台北市随一の規模を誇る士林夜市に足を運びました。士林市場の地下は台湾式フードコートになっていて、ファーストフードのお店が軒を連ね、どのお店で夕食を食べるか必ず迷うスポットです。士林夜市は MRT 淡水信義線を利用して士林駅下車徒歩7、8分で着きます。帰り道、士林駅に向かう予定が方向に鈍りが生じ、気が付いたら隣駅の劍潭駅に到着していました。間違えて気が付いたのですが、たぶん士林夜市へは劍潭駅が近いです。とりあえず問題なく電車で

乗ることができたので一安心。ちなみに MRT の駅構内や車内での飲食は禁止です。日本も見習いたいものです。2日目の台中市散策に備え、1日目は終了。

2日目。この日も朝から灰色の雲が覆いかぶさり、今にも泣きだしそうな空模様からスタートです。

台北駅から臺灣高速鐵路、通称「臺鐵」(台湾新幹線)を利用して台中市に向かいます。台湾グルメの一つ台湾駅弁があるとの情報を経て、ホテルの朝ご飯を軽めの果物だけで済ませていたのですが、朝早い時間帯は駅弁の販売はしておらず、残念ながらゲットできませんでした！でも、事前に講師の佐野氏から「ボリュームがあって1200キロカロリーは優に越していると思います。」との説明を受け、若干ビビっていたので、もしかして結果オーライだったかも(汗)。台湾新幹線は日本製ということもあって、慣れ親しんでいる車内と何ら変わらず、約1時間の小旅行を楽しみながら台湾の中心にある台中市へ到着しました。

まず向かったのは東海大学(日本の東海大学とは関係ありません)にある、東海大学路思義教堂(学内チャペル)。構内入口から歩いて数分、朝露に濡れた芝生の広場に悠然と建つ教会が目の前に現れ、写真でしか見たことのないその風景にただただ感動するばかりです。1962年、建築家 I・M ペイ氏と陳其低氏により設計されたこの教会は、地面から這い上がるように空に伸び、小ぶりの佇まいながら壮大さを感じるデザイン

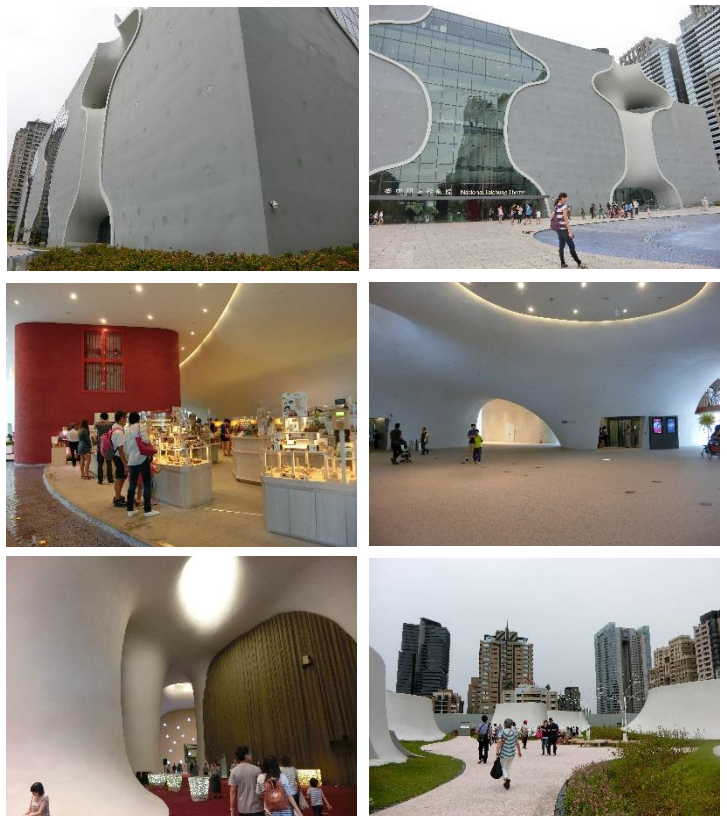


で、オレンジ色のタイルに覆われた4つの屋根？壁？で構成されたスタイルは、約50年前の建築と思えないほどの完成度です。教会内はワッフル型のコンクリート壁で支えられ、天窗へと細く続く様子はなんとも荘厳で、どの角度から見ても絵になりすぎる建築です。御年99歳の I・M ペイ(イオ・ミン・ペイ)氏は、丹下健三氏と共にアジア人を代表する建築家の重鎮です。代表作はルーヴル美術館のガラスのピラミッドなど。

さて、築54年の現代建築を堪能した後は、今年9月オープンしたての出来立てホヤホヤ、台中國家歌劇院へ。

設計は台湾大学図書館と同じく伊東豊雄氏。10年の歳月を経て今年9月にグランドオープンを迎えました。現れたその姿は「ひゃ〜！」のひとつ。外観にまわりつく曲線は一体何？中はどうなっているの？ワクワク感が止まりません。そして一步、館内に足を踏み入ると、「ほお……」と、ため息とも言えない声が漏れてしまいました。伊東氏は人の体の中をイメージして空間をデザインし、外と内の区別を付けず、外の「広場」と内の「広場」との継続性を持たせた空間づくりとなっています。このすべての曲線が建物を支える構造体となっていて、外観の曲線部分はその構造体の一部で、外側に見せることにより、さらなる継続性を生み出しています。

1階部分は解放感あふれ、ショップやレストランなどがあり市民の憩いの場となっています。2階から4階は劇場部分となっていて、赤い絨毯が引かれ、オペラ座の格式が漂い、1階から続く



曲面を引き継ぎダイナミックな空間となっていました。この曲面は屋上庭園へとつながり、どこかの星にきたよう

な、ちょっと不思議な感覚に襲われます。講師の佐野さんから、この建物が完成するまでのエピソードや、大変苦勞された裏話も聞くことができ、この空間の下にいることがとてもありがたく、まさに胎内の中にいるような感じがして、空間力の凄さに圧倒されました。

台中国家歌劇院の見学後は、しばし休憩。お昼ごはんは「燉品棧(トウビンサン)」で台湾客家料理を頂きました。次から次へと大皿が運ばれてきて、食べるのに大忙し。昨晚の士林夜市で食べた青菜の炒めも同様、こちらのお店も青菜の炒めもが美味しい！メニューには合時青菜とありましたが、シャクシャクした触感とニンニク風味がとてもよかったです。スッキとした台湾ビールは、しっかりした味付けの料理とよく合いました。

お腹も満たされ、次に訪れたのは台中市街地にある公園の野外劇場「圓滿戶外劇場」。日本の建築家渡辺誠氏により既存の野外劇場に、RIBBON(リボン)と称する形の天蓋を作り、バックステージ等を新設しています。ゲートが閉められていたため近くに行くことはできませんでしたが、緩やかな起伏を持つ当公園から見下ろすことはできました。



台中市は日本統治時代に建てられた建築も数多く残っていて、台中駅も当時の面影を残す建物のひとつです。台中駅周辺は当時の日本人が作った街並みも残っています。1922年、日本人眼科医宮原武熊が開業した「宮原眼科」をパイナッフルケーキで有名な日出グループが買い取り、同じ通りにある「台中市第四信用合作社(銀行)」と合わせリノベーションをし、カフェ兼スイーツショップとして新たにスタートしました。店内はアンティーク調にデザインされ、信用合作社ではレコードやCDをイメージしたお菓子のパッケージが並び、壁や床には台湾コイン1元が埋め込まれていて、総額いくらかは秘密だそうです。とにかくパッケージのデザインが可愛く

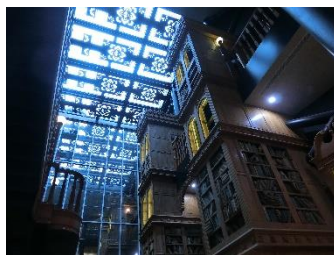


第四信用合作社の床や壁には1元コインが。CDショップをイメージした内装。

て、眺めているだけでも楽しいのですが、つつい欲しくなる完成度の高さです。また、宮原眼科はハリーポッターの世界に紛れ込んだようなインテリアで、チョコレートやお菓子、マグカップやエコバッグのどの雑貨もあり、お土産にもピッタリなお店です。2階はカフェとなっていて、台湾スイーツが楽しめます。ただし、一人380元以上オーダーしないとイケないシステムなので、旅の土産にとマンゴーシェイクをオーダーしてみたところ、量があつて



宮原眼科



ハリーポッターの世界みたいな内装。



鏡かと思いきや、結構奥行きがあります。



豪華！マンゴーシェイク

ちょっと怖気づいたのですが、とてもおいしく頂きました。

この日の夕食は佐野氏セレクトのレストラン「醉鴛鴦啤酒庭園廣場」。地元の人達でにぎわうアジアテイスト満載のお店です。海鮮の蒸し物が人気メニューだそうで、今回はエビの踊り蒸しでした。他にも青菜のスープや烏骨鶏のスープ、酢豚、魚の姿蒸し、鶏肉や白身魚のから揚げ、烏賊と葱の炒め物 etc. 食べきれないほどの大皿料理がテーブルいっぱいになり、並び圧巻でした。人気メニューのひとつ、エビの踊り蒸しはちょっと可哀想でしたが、とても美味しくて逸品です！

夜になると雨が強くなる今回の台湾旅行事情。雨足が強くなり、急ぎ足で台中の街を去ることになりました。臺灣高速鐵路に乗って台北市に戻ります。

3日目も曇り空からスタート。この日は海外からの観光ではあまり訪れない台湾東側の街、宜蘭（イーラン）へと向かいます。北宜高速道路を東へ進むにつれ雨足が強くなり、世界で5番目に長い雪山トンネルを抜けた先は・・・、本格的な雨が降る宜蘭の街でした。

宜蘭で最初に訪れたのは、蘭陽博物館。2010年、台湾の建築家姚仁喜（クリス・ヤオ）氏によって建てられた博物館で、宜蘭の歴史や風土を展示、学習できる博物館となっています。建物自体は地面から突き出たよう造形で、ケスタと言われるこの地域特有の地理を表現。また地元で産出

蘭陽博物館。植栽の形も建物同様斜めに切り取られたこだわりぶり。



される様々な鉱石を利用し、この地の四季を表しているそうです。エスカレーターで一気に最上階まで上がり、回遊しながら階下し、実物大の人形によってこの地方の歴史や風土を表現、体現できるように工夫されています。ここで気が付いたのですが、とにかく台湾の人は写真撮影が大好き！ マネキン人形と一緒にポーズをとって写真を撮る人達が大勢いて、『お邪魔しては申し訳ない』と、かなり恐縮しながら歩きました。日本語音声ガイドによると、宜蘭の街は台湾の中でも雨が多く、また山からの雪解け水により昔から農業が盛んで、漁場にも恵まれた



ため、商業の街として栄えたそうです。雨の街「宜蘭」も悪くないかも。

宜蘭の礁溪は温泉としても有名で、名護市庁舎や宮代小学校の建築でも有名な象設計集団が手がけた温泉施設があり、無料の足湯場でしばし休憩。ちょっと熱めのお湯ですが慣れてくると結構心地良い。でも、さすがにじんわり汗が滲んできて、10分も浸けてられませんでした。有料の温泉施設へと続く遊歩道は象設計らしいデザインで、この土地にぴったりの雰囲気を感じていました。

象設計集団が手がけた礁溪温泉施設。



宜蘭は黃聲遠（ホアン・シェン・ユエン）氏を中心に台湾各地から集まってきた若手建築家集団フィールドオフィス・アーキテクツにより街づくりが行われ、彼らの作品が各所で見られます。コミュニティーセンターや遊歩道、戦時中に使われた負の遺産である施設のリノベーションなど。



彼らの作品の一つ、礁溪生活学習館は約10年前の2005年に完成ですが、その割には年期が入り、20年以上の歳月を経ているような風格さえ感じます。複雑なコンクリートの塊で、表通りと裏通

りの間には高低差があるそうですが、その高低差を利用して、裏と表の区別を無くし、自由に通り抜けできることにより内と外の区別も曖昧になり、その微妙な曖昧さが魅力的な建物です（自分で何を言っているのかよくわかりません）。ところどころに見せるパステル調のタイル壁がチャームポイントとなっていて、手つかずの木々もまたこの建物の良さの一つです。ガーゴイルが自然と鉢植え状態になっていたことにも可愛らしさが窺えました。

また、宜蘭県政府社会処から続く歩道橋を進むと、宜蘭河にかかる橋の脇に作られた津梅橋遊歩道につながり、これらも彼らの作品のひとつです。歩道のない大橋の横に鉄パイプを括り付け、人（自転車もOK）専用の道を作っちゃいました！ 的なユニークな造物。途中、橋の中心部分にはランディングを設け、景色を楽しむこともできます。



津梅橋遊歩道



数多くある彼らの作品で印象深いのは「員山機堡」。日本の統治時代、宜蘭には日本の特攻隊員が特攻に向けて駐屯していたそうです。この施設は特攻機を隠すための壕で、半分壊れかけていた壕を修復し、資料館と併せ歴史を物語る空間となっています。藁でできた特攻機のオブジェがなんとも物悲しく、壕の屋根にある空中歩廊は資料館の屋根をつたい、空に伸びた先は途中で切れていました。特攻機が離陸したのち旋回し、二度と戻ることのない軌跡を描いているそうです。日本の負の歴史を他国で感じ、反戦を込めた空間力に圧倒され、小雨降る中、子供たちが走り回っている様子が印象的でした。

街中には彼らの作品が数多くあり、郷土文化を守り、人材や風土をはぐくむ活動拠点として設計した楊士芳紀念林園や、市民が自由に利用できる公共施設の羅東文化工場(スカイアートギャラリー、巨大庇広場、上空を走るランニングコースなど)など、より良いまちづくりを目指す建築集団の活動があちこちに見られ、見学するには時間が足りないくらいです。



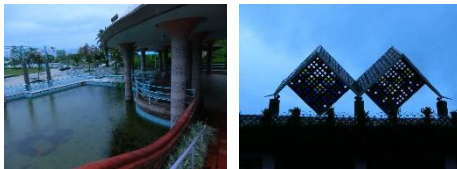
藤森信照氏設計の茶室



上空ランニングコース



大キャノピー(巨大庇)



宜蘭最後に訪れたのは、象設計集団が手がけた冬山河親水公園。すでに日も暮れて、群青色に染まる公園は象設計の独特なデザインと相まって、何とも言えない雰囲気があって、雨が降る静かな園内を独占できたような感じでした。

宜蘭でのランチは八角の香りが効いた台湾ステーキ、夕食は台湾でも有数の規模を誇る羅東夜市にて屋台フードの定番である「葱油派」というお好み焼きに似たファーストフードや豆花という杏仁豆腐のような優しい甘さがちょうどよいスイーツを頂き、野良犬ちゃんがどこからともなくやってきて、箸を持ったお店のおばさんに追い払われるという懐かしい光景に出会うことができ、雨の羅東夜市は楽しく過ぎていきました。昔ながらの宜蘭の街に、彼ら独特の建築が違和感なく溶け込み、自然に街を形成していることが素晴らしいと思いました。

4日目、最終日は集合時間まで自由行動となり、オプションで企画されていた岡村氏と佐野氏と共に、松山地区にあるニュースポット松山文創園區の散策ツアーに参加しました。その前に、台湾の朝ごはん事情を体験しようと台湾をよく知る佐野さんに連れて行って頂いたのは、朝市で有名な雙連市場。市場入口の街角にある「雙連古店」が佐野さんのお勧め店です。ご夫婦で切り盛りする小さなお店ですがメニューは豊富で、一度食べてみたかった台湾おにぎりを握ってもらいました。お父さんの大きな手で握っているせいかととても大きくて！ 気になる中身はお肉のそぼろのようなものに揚げた麩と切干大根？のお漬物のようなものが入っていて美味しい。その他、細い麺に魚介の出汁が効いたとろみスープで頂く麺線、卵のクレープのような蛋餅は台湾朝ごはんの定番だそうです。それぞれをオプションツアーに参加した皆さんとシェアしながら朝ごはんを満喫しました。台湾夜市とは違い、朝の市場は野菜や果物、乾麺などが売っていて台湾の食事情が窺えます。長い公園にそって連なる朝市は約300m続きました。楽しかった！



陽気なご夫婦がきりもりする雙連古店。飯團はもっちりとしたもち米を使用



さて、大通りに出たところでタクシーに乗り、目的地松山文創園區に向かいます。松山文創園は煙草工場の跡地を再開発し、旧工場の建物を利用したギャラリーやカフェ、スーパーアショップなどがあります。また2013年、伊東豊雄氏が設計した複合施設「松山台北文創ビル」が園内に建設されました。「文創」とは造語で、新しい言葉らしく「ライフスタイル」のような意味で使われるそうです。



文創ビルの屋上の屋根は、建築前、遠くに山々の峰が見えていたため、その風景を再現するように曲線の屋根を配置。ですが、建物が大きいので屋根の状態はあまりよくわかりませんでした。当時、託児所として使用していた建物は本屋とカフェが一緒になった「閱楽書店(Yue Yue Bookstore)」というショップになっていて、小さな空間ですが、建築の本なども置いてあり、充実していました。ゆっくりお茶をして過ごしたい可愛いカフェでした。



倉庫群からみる文創ビル



文創ビルから見る工場棟



NENDO の「CUPNOODLE」

設計館を利用したデザインセンターでは今年8月から日本のデザイン会社「NENDO」の回顧展が開催されていたよう

です。電気が消えて暗かったのですが、少しだけ作品を見ることができました。このように台北の街は活気に満ちた街づくりが実現しているようです。

さて、最終日の建築散歩は松山文創園區で終了、また4日間、くまなく台湾建築事情についてご説明頂いた佐野氏とはここでお別れです。台湾の建築のみならず、文化や生活全般についてもたくさん説明して頂き、大変お世話になりました。

今回の台湾建築散歩ツアー。その昔、台湾と日本は歴史的な深いつながりを持ち、相互の国に影響を与えてきました。そして今、建築や街づくりという世界で新たにつながろうとしています。日本人建築家が考えた空間を台湾の人々が利用し楽しむ。嬉しいような羨ましいような、そんな印象を受けたツアーとなりました。この体験を機に、日本国内にある台湾建築家が作った建築作品を見学しようと思います。

建築散歩台湾ツアーに参加された皆さん、大変お疲れ様でした。そして岡村講師、佐野講師、ありがとうございました。また、現地でお世話になってガイドさん、ドライバーさん、安全運転ありがとうございました。

2016年10月 S.N.